

# 災害情報のダブル・バインド

矢守 克也<sup>1</sup>

<sup>1</sup>京都大学防災研究所 巨大災害研究センター  
(〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄)

キーワード：災害情報，ダブル・バインド，メタ・メッセージ，情報待ち

## 1. メタ・メッセージ

コミュニケーションの一切から離れて、それ単体として存在する災害情報は、理屈としては想定しえても現実としては無意味であろう。すなわち、すべての災害情報は、災害リスク・コミュニケーションとして、言いかえれば、だれかからだれかへのメッセージとして成立する。災害情報をコミュニケーションとして、すなわち、メッセージとして見た途端、メッセージ一般に該当するいくつかの重要な難問に突きあたる。その一つを、独自の精神医学的コミュニケーション論を展開し、かつ文化人類学者でもあったグレゴリー・ベイトソン (Bateson, 1972) は、「ダブル・バインド」と呼んだ。ダブル・バインドとは、一言で言えば、メッセージとメタ・メッセージとの間に生じる矛盾・葛藤によって、メッセージの受け手が一後の述べるように、実はメッセージの送り手も一破裂状態になることである(詳しくは、矢野 (1998)、野村 (2008) に明快な解説がある)。

まず、メタ・メッセージについて説明が必要であろう。ベイトソン自身が注目した事例を若干改変して簡略に紹介しよう。今ここで、2匹の子犬がじゃれあっているとする。時には、お互いに噛みついたり爪を立て合ったりして、われわれには、純粋な攻撃的行動と区別できないこともある。しかし、通常、致命的な傷を相手に与えるようなことはないし、事実、われわれも、それはまさにじゃれあっているのだと認識できる。

このとき、このじゃれあいには、2つの水準のメッセージが並存している。第1のメッセージは、「これは攻撃だ、噛んでやるぞ!」というメッセージである。これが存在していないと、じゃれあい(喧嘩遊び)そのものが宙に浮いてしまう。しかし、同時に、もう一つ、第2のメッセージが並存している。それは、「これは遊びだよ、本気の喧嘩じゃないんだよ」というメタ・メッセージである。第2のメッセージがメタ・メッセージなのは、一つには、それが明示的ではない、言いかえれば、表舞台には出てこない暗黙のメッセージだからである。また、

もう一つには、それが、第1のメッセージとは異なる水準から第1のメッセージ全体を意味づける機能を担っているからである。

メッセージが、メッセージとメタ・メッセージという2重の構造をもっている事実は、人間が関わるコミュニケーションでも変わらない。いやむしろ、通常、より鮮明にそのことがあらわれる。たとえば、関西人は、不注意にコトをし損じた相手や「ちょっとやり過ぎでは」と思う相手に対して、しばしば、「お前、ほんまアホやなあ」と言う。ここでも、まず第1に、明示的なメッセージが、文字通りの意味として存在する。すなわち、「失敗するのは愚か(阿呆)である」、「調子に乗りすぎるのはよろしくない」といった批判的なメッセージである。しかし同時に、「次からは気をつけるよ」といった気遣いや愛情、さらに進んでは、「そこまでやったことは根性があるとも言える」といったちょっとした尊敬の念が、メタ・メッセージとして並存している場合も多い。

ここできわめて重要なのが、メッセージとメタ・メッセージの間に発生する矛盾や葛藤である。上述した2つの事例においても、メッセージとメタ・メッセージは、それら2つを同一平面上で論理的関係を検討してみれば、相互に矛盾・葛藤していると言わざるを得ない。前者では「これは喧嘩だ/これは喧嘩ではない」、後者では「あなたは愚かである/あなたは愚かではない」という2つの相矛盾するメッセージが同時に発せられているからである。しかし、通常は、これら2つのメッセージがそれぞれ、明示的な水準(「図」の水準、あるいは、テキストの水準)とメタの水準(「地」の水準、あるいは、コンテキストの水準)とに分離されることによって、矛盾や葛藤はとりあえず克服される。いや、むしろ、両者は互いが他を前提にすることによって、味わい深く繊細なコミュニケーションを実現しているとすら言える。すなわち、じゃれあいは、半ば本気だからこそ面白いし、「アホやなあ」は、半ば批判、半ば愛情と認識されるからこそ人情味のある言葉として通用する。

ところが、この矛盾や葛藤がそのまま表面化してしま

う場合もある。前者で言えば、ふとしたことから、じゃれあいが本気の喧嘩に発展してしまう場合である。後者で言えば、「アホ」と言われた相手の方がカチンと来て、「どうせ、俺はアホや」とふて腐れてしまい、言った方も引っ込みがつかなくなって、「そういう態度はないやろッ」などと応酬している間に、売り言葉に買い言葉になってしまう場合である。メタ・メッセージが失効してしまい、第1次のメッセージがそのまま文字通りの意味で通用してしまうわけである。

## 2. ダブル・バインド

メッセージとメタ・メッセージの間の矛盾や葛藤は、上で見たように、いずれか一方（通常は、メッセージの方）が突出して問題化することがある。しかし、より深刻なケースとしてペイトソンが指摘するのが、メッセージとメタ・メッセージがそれぞれの効力を保ちながら、かつ両者が本来的に持っていた矛盾性が露見してしまい、メッセージの受け手が二進も三進も行かなくなるケースである。これが、他ならぬダブル・バインドである。メッセージとメタ・メッセージ、それぞれに従うことが2つの異なる水準に配分されることによって、逆に味わい深く、複雑なニュアンスのあるコミュニケーションが実現するのではなく、矛盾が矛盾としてそのまま露呈してしまうケースである。メッセージに従うこと（第1の拘束）とメタ・メッセージに従うこと（第2の拘束）、この相矛盾する両者によって拘束され身動きができなくなることから、ダブル・バインド（二重の拘束）と呼ばれる。別の言い方をすれば、ダブル・バインドとは、メッセージとメタ・メッセージとの間の逆立関係によって、コミュニケーション全体が不全に陥っている状態、と位置づけることもできよう。

ダブル・バインド論が、典型的なダブル・バインド状況として、しばしば引き合いにだす事例が、過保護な親子関係に見るコミュニケーションである。たとえば、親が、「この科目は1回生のときに履修しておかないと後で困るわよ」などとお膳立てしてくれないと、ろくろく講義にも出て来ない大学生がいるとしよう（実際にいる、という話を聞いたことがある）。そういった親は、子どもがきちんと講義に出てきているかどうか不安で、大学に電話で問い合わせるといったこともしようである（これは、筆者自身、実際に体験したことがある）。要するに、親は子離れができず子は親離れができず双方ともそれに苛立っているのだが、それを克服できないまま現状がズルズルと続いているような関係である。

このような関係にあって、親が子どもに、「大学生なのだから、もっと自立しない」、「自分で解決しなさい」と指示・命令したとしよう（このコミュニケーションも、実際に十分ありそうである）。このメッセージを受けとった子どもは、どうすればいいのか。第1のメッセージ、すなわち、明示的なメッセージは、文字通り、親からの

自立・独立を指示・命令している。しかし、重要なことは、このメッセージが同時に、次のようなメタ・メッセージを伴っていることだ。つまり、「自立せよ、という私の指示・命令に従いなさい」（言いかえれば、「自立するな」）。このようなメタ・メッセージは、「自立しなさい」というメッセージと一緒に表れる親の表情、口ぶり、身ぶり、あるいは、親の別の行為（たとえば、このような指示を出しておきながら、心配になって受講状況を大学に問い合わせるなど）によって発信されている。容易にわかるように、このとき、子どもがメッセージに従うことはメタ・メッセージに従わないことを意味し、その逆も成り立つ。子どもは股裂き状態に陥る。

子どもを立ちすくませているこのダブル・バインドが、メッセージを発信した親の方をも縛っていることが重要である。子どもが相変わらず親頼みの態度をとれば、第1次のメッセージが伝わっていないことになるし、逆に、子どもが独立独歩で自由にやり始めても、それはメタ・メッセージが伝わっていないことを意味し、「ほんとうに、この子、大丈夫かしら」と親は不安になる。この意味で、親離れ/子離れのダブル・バインドは、メッセージとメタ・メッセージの間のダブル・バインドであると同時に、メッセージの送り手と受け手の双方をバインド（拘束）しているという意味で、言ってみれば、ダブル・ダブル・バインドだと言える。だからこそ、双方が双方を突き放そうとしながらも実は両者はもたれ合っており、それがドラドラと続いていくことになるのである。

## 3. 災害情報をめぐるダブル・バインド

以上、ダブル・バインド論について長々と記述を続けてきたが、災害情報に関する筆者の問題意識を表現するにあたって、必要な前提であったのでお許しいただきたい。結論を先に記そう。現在の日本社会における災害情報をめぐる課題の多く、特に、片田ら（たとえば、片田、2006；片田・児玉・桑沢・越村、2005）が、「行政任せ」、「情報待ち」といった用語で指摘している課題は、親離れ/子離れをめぐるダブル・バインドと酷似しているのではないだろうか。もちろん、そこにおけるコミュニケーションの主役は、災害情報の生成・伝達にあたる専門家や行政機関と、その受け手たる一般の住民である。

次節以降、各論に入る前に、筆者が災害情報のダブル・バインドとして概念化できると考えていることを概観しておくことにしよう。そのためには、災害情報コミュニケーションにおいて発信されているメタ・メッセージに注目することが不可欠である。私見では、この論点は、「災害情報のジレンマ」と題された田中（2008）などを除くと、従来の研究では部分的、単発的な現象としてとり上げられることはあっても、メタ・メッセージといった一般的かつ統一的な視点から包括的に考察されることはほとんどなかったように思われる。

さて、たとえば、「昨夜からの大雨で、××川は破堤

の危険がありますから、早めに指定の避難所に避難してください」という情報を考えてみよう。このメッセージは、以下のようなさまざまなメタ・メッセージを随伴しうるし、実際にしていると筆者は考える。一つには、「避難というものは、このようなメッセージを受けとってから、言いかえれば、メッセージを待つてするものだ」というメタ・メッセージである。言うまでもなく、これが、「情報待ち」として指摘される問題群の元凶であろう。この点については、4節で述べる。また、次のようなメタ・メッセージも存在している。「世の中には、このようなメッセージを作る（あるいは伝達する）私たちのような役割の人と、みなさんのようにそれを受けとってその内容を実行に移す役割の人がいますよ」というメタ・メッセージである。これは、まさに過保護と過依存が融合した行政／住民関係を再生産するメタ・メッセージであろう。この点については、5節で述べる。

さらに、「災害情報は、自然的状況または社会的状況を客観的かつ一意的に記述するものだ」というメタ・メッセージも発信されている。これについては、筆者自身、近年、防災ゲーム「クロスロード」（矢守・吉川・網代、2005；吉川・矢守・杉浦、印刷中）という別種の形態—多様な関係者間の矛盾や葛藤を表現する形態—をとる災害リスク・コミュニケーション技法を提案してきた。この点については、6節で述べたい。

#### 4. 「情報待ち」を再生産するダブル・バインド

災害情報が近年質量ともに豊富になってきたことが、かえって、地域住民に災害情報を待つ態度を醸成し適切で迅速な避難の障害になっていること、すなわち、「情報待ち」の問題をもっとも明確に、かつ、実証的なデータとともに提起してきたのは、片田ら（片田ら（2005）、片田研究室（2003））である。たとえば、片田ら（2005）は、2003年5月に発生した宮城県沖地震に見舞われた気仙沼市で、津波避難に関する調査を実施している。この地震では、過去の事例から推して当然津波の来襲が予想される状況にあったにもかかわらず、実際の津波避難率が2%未満にとどまったことが報告されている。

この報告の中で、片田ら（2005）が特に問題視したのが、住民が、「避難しなかった」理由とその間何をしてきたかである。片田ら（2005）は、調査対象地域となった気仙沼市が津波常襲地域であること、さらに、当然津波の襲来を予期して然るべき震度5強もの揺れがあったことを踏まえた上で、次の事実を重視している。すなわち、「避難しようとは思った」が、「避難しなかった」回答者を対象にその理由を尋ねたところ、全体の54.6%（1位）が「津波被害なしの情報を聞いたから」と答えている点である。この情報は、地震発生から12分後に伝えられた「潮位の変化はあるが津波被害のおそれなし」という情報のことである。

片田ら（2005）は、地震発生が夕方6時24分と夕食時

であったことから、回答者の約8割がテレビを見ていたことを踏まえ、多くの住民が「避難の準備をしながら津波警報などの津波に関わる情報を待ち続け、『津波被害なし』という情報を得るまでの12分間を過ごした」（p.96-97）と指摘する。すなわち、「過剰に情報に依存した避難の意思決定」（p.97）を問題視している。同じ事例については、牛山・今村（2004）も、7割以上の調査回答者が「津波警報・避難勧告待ち」の状態にあったことを見いだしている。「情報待ち」は、他の災害事例でも観察される。たとえば、2003年9月の十勝沖地震（吉井・田中・中村・中森・三上、2004）、2004年9月の紀伊半島南東沖地震（河田（2006）、黒田（2008））などの事例においても、地域住民の多くが地元自治体などからの「情報待ち」、「指示待ち」の状態にあつて、それが津波避難を遅らせたことが指摘されている。

以上に述べてきた「情報待ち」に関する事実認識やその問題性については、筆者も論者たちに賛同する。その上で、筆者なりの見解を付加するならば、「情報待ち」をもたらした原因をどのように見るかである。情報化社会の中で災害情報が質量ともに豊富になったため、あるいは、自分で自分の身を守る意識の欠落のため—これらの指摘は、直接的に目に見える理由の指摘としては正当なものだろう。しかし、さらにその先、すなわち、なぜ、どのようなメカニズムに基づいて、豊富な情報がそれを能動的に駆使する態度ではなく、かえってそれに依存するという受動的な態度をもたらすのか、あるいは、そのような状態から逃れることがなぜ困難なのか、が問われねばならない。

避難勧告や指示に関わる災害情報をめぐるダブル・バインドは、その理由をよく説明してくれるように思われる。すなわち、多くの場合、災害の専門家が生成し、行政やマスメディアが発信する「避難せよ」との災害情報は、それが何度も反復される間に、このメッセージが文字通りの意味と同時に—いや、皮肉なことに、メッセージ本体よりも強力に—、次のメタ・メッセージを住民に届け続けてきたのである。すなわち、「避難は災害情報を受けとってから実施せよ」、さらには、「災害情報を受けとらなければ避難を控えよ」というメタ・メッセージである。

もちろん、研究者も行政も、徐々にそのことに気づきつつある。しかし、事態がいつそう根深いものになりがちなのは、上の問題意識をうけて発せられる「情報に頼らず逃げてください」というメッセージそのものが、皮肉なことに、再びダブル・バインド的なのである。なぜなら、「情報に頼るな」というメッセージを受け入れることは、まさに専門家や行政から発信される情報（「情報に頼るな」という情報）に頼っていることを意味するからである。言うまでもなく、これは、先に見た、親離れ／子離れを阻んでいるダブル・バインドにおける「自立しなさい」とまったく同型的である。

では、このダブル・バインドから逃れるための脱出口はどこにあるのか。その鍵は、この後述べる第 2、第 3 のダブル・バインドをめぐる検討を通して見えてくる。

#### 5. 行政・専門家依存を再生産するダブル・バインド

多くの災害情報が、「世の中には、このようなメッセージを作る（あるいは伝達する）私たちのような役割の人と、みなさんのようにそれを受けとってその内容を実行に移す役割の人がいますよ」というメタ・メッセージを、メッセージともに同時発信していることにも注意が必要であろう。これは、自らの安全について行政や専門家に過度に依存する住民と、住民の安全をパターンリスティックに過度にコントロールしようとする行政や専門家という、過保護と過依存の関係を再生産する主役を演じているメタ・メッセージである。

もちろん、こうした状況に対する危機感は、すでに表明されている。防災実践の領域における「自助・共助・公助」の見直し議論は、その表れの一つである。たとえば、上で言及した津波避難現場で言えば、自助・共助・公助の見直し議論は、典型的には以下の形式をとる。すなわち、避難判断の最終の拠りどころが住民自身にあることの再認識を住民に求め、従来型の自治体主導の避難（公助）だけでなく住民自身の判断による早期避難（自助）が住民に要請される。同時に、その場合、近隣住民が相互に避難を促しあうこと、および、地域社会で高齢者や身障者などの避難を援助することや、住民参加型の教育や訓練を事前に重ねること（共助）が期待される。要するに、津波避難に関する最終的な主体であるにもかかわらず、これまで受動的な役割しか期待されてこなかった住民をあらためて主役の座に据えて、行政・専門家依存を脱却しようというトレンドである。

この点について、より具体的に、かつ、重要と思われる事例を1つだけ掲げておこう。上で参照した気仙沼市と同様、津波の常襲地帯である三重県尾鷲市において、独自の津波災害総合シミュレータを中核ツールとして、研究者、自治体、住民が一体となった防災事業を主導してきた片田（2006）の研究が示唆に富んでいる。片田（2006）は、一連の防災事業を進捗させる渦中に、はからずも尾鷲市住民が体験した紀伊半島南東沖地震の際に住民が示した対応に関して実態調査を行っている。

注目すべきは、気仙沼市と同様、避難率が全体に低調であった中で、海岸に面していることもあって最も避難率が高かった港町地区の内陸側に隣接する中井町地区が、港町地区に次いで高い避難率を示したことである。これは、片田（2006）によると、多くの港町住民が避難場所へ移動する際に中井町内を通過したために、その様子を見た中井町住民も避難をしたためである。このように、避難の声掛けや避難している人を目撃することが避難の促進に寄与することは、台風 23 号災害（2004 年）など他の事例でも確認されているし、同時に、集合行動に関

する実験的な研究による裏づけもある（Sugiman & Misumi, 1988）。このことから、片田（2006）は、地域社会の自主防災組織の中に“率先避難者”をつくることを推奨している。“率先避難者”とは、「地震発生後に隣り近所に声をかけながら、とにかく早く避難を開始する人」（p.18）だとされる。

ここで示唆されていることは、災害情報をトリガーとして何らを行うという構図が維持されている限り、メタ・メッセージの副作用によって、災害情報の発信者対受信者という構図から脱却できないという洞察である。そして、この構図に代わる代替案として提起されているのが、一般の人びと（の行動）そのものをむしろ災害情報として機能させる、という考え方である。筆者の考えでは、“率先避難者”とは、言わば、自ら情報となった人びとである。人びとがそのふるまい（避難するというふるまい）を通じて、互いが他者にとっての災害情報を共同生成するという能動的役割を担うことによって、ダブル・バインドの構図がもたらしてきた否定的な帰結を免れようとする試みが、“率先避難者”に他ならない。

#### 6. 客観的な災害情報観を再生産するダブル・バインド

災害情報が発するメタ・メッセージ、すなわち、メッセージ本体に付随する暗黙のメッセージとしては、次のようなものもある。それは、「災害情報は、自然的状況または社会的状況を客観的かつ一意的に記述するものだ」というメタ・メッセージである。これは、別言すれば、災害情報には、多義性や曖昧性、あるいは、意見の葛藤・矛盾は禁物であり、「時間降水量が×ミリを越え大雨警報が発令されました」、「危険水位を超えたから避難してください」など、「if・then…」形式の一意的な状況認識や行動指示の形式たるべきだ、とのメタ・メッセージでもある。そして、このような形式の情報が多数束ねられ体系化されたものが、防災計画や対応マニュアルに他ならない。たしかに、災害情報に含まれる曖昧性や多義性が、ときに、情報確認のための時間を空費したり不適切な災害対応を生んだりすることはある。さらに進んで、それが無責任な流言やうわさの温床ともなることは、筆者自身が学んできた社会心理学の常套的知見でもある。これらの認識自体には、筆者も異論はない。

しかし、災害情報の活用場面のすべてが、このような情報観で済むということも、逆にあるまい。実際、災害情報が、自然現象そのものに関する情報から離れ、自然現象に対する人間・社会の反応（社会現象）に関する情報としての性質を増すほどに、客観的な災害情報観は通用しにくくなる。このことは、たとえば、緊急地震速報そのものの生成や伝達に関わる問題群と、緊急地震速報に対する人間・社会の反応に関する情報の生成や伝達に関わる問題群とを比較してみるだけで明らかである。前者と比較して、後者に、人による違い（たとえば、情報の受け手の年齢や性別の差違など）、状況の違い（たとえ

ば、一般家庭か学校か、あるいは、病院か公共交通機関かなど)が不可避にもたらす情報の曖昧性、多義性の問題がより多く浮上することは明白である。

もっとも、災害情報をめぐるダブル・バインドを鍵概念とする本稿で焦点を当てたいのは、上記の違いそのものではない。そうではなく、従前型の、客観性と一意性を志向した災害情報が社会を流通する過程で、それ以外のタイプの災害情報は情報にあらずとの態度が醸成され、そのような情報観がひるがえって、「防災とは何をする事なのか」という基本的な認識や態度を特定のタイプのものに矮小化してしまう危険をこそ問題にしたいのである。すなわち、今日、防災と呼ばれている社会的実践は、言うまでもなく非常に複雑で、本来、その全貌の把握は困難である。しかし、たとえば、「うちの地域も防災に力を入れないといけませんね」という何気ないセリフに見られるように、われわれは通常、防災について、そこにある机についてと同様、苦もなく語り、みなで論じることができる。

これは、状況認知論(上野(1999)など)が示唆するように、複雑な防災実践をわかりやすく可視化(現実化・対象化)し、人びとによる共同実践を容易にするための広義の道具—情報はここで言う道具の最有力パーツである—が、そこに介在しているからである。そして、重要なことは、防災を含む特定の実践(目標状態の実現に向けて何かをすること)が何であるかという認識と、実践を支える道具とが互いが互いを支えるニワトリと卵のような関係にあることである。別の言い方をすれば、実践がまずあってそれに応じた道具が開発されるという常識に合致したわかりやすい側面だけでなく、導入される道具の方が逆に実践そのものを構成するという反対方向の側面もあるのだ。

具体的に考えてみよう。たとえば、気象衛星からの映像という情報がある。ここには、この映像本体をはじめ、映像を撮る衛星、映像の送受信装置など、多くの道具が関与している。そして、重要なのは、これらの道具が利用されていることと、その開発・操作に関わる専門技能が社会的に認知され、映像をもとに気象情報を生成する専門的な職種があるとみなが認識し、マスメディアが気象情報を広範囲に配信する役割を果たし、それを自治体職員や一般の人びとが受信し何らかのリアクションを示す—これらの一連の活動が展開されることとは表裏一体だということである。正確に言えば、上で述べた一連の活動こそが防災実践なのだという実践観と気象衛星画像という情報とは、同じことの表裏なのである。したがって、より踏み込んで言えば、このタイプの情報を活用することは、この種の防災実践を支える基盤となると同時に、防災実践を別様に考えること、別様に実践することを阻害しているとも言える。

あるいは、先述の通り、災害対応マニュアル、地域防災計画などは、別の種類の情報と見なすことができる。

これらの情報は、防災実践とは、多くの人びとを一定の地位・役割体系へと整序し、その中で付与される権限と義務に基づく活動を人びとに配分することだ、という感覚を再生産し続ける。防災実践とは、判断・指示の集積であり、また、その伝達・受容だと見なす、経営管理的な防災実践観である。もちろん、このタイプの道具(情報)によって、それを欠けば無秩序に入り乱れるほかなかったかもしれない多くの人的、物的資源が組織化され、そのストックとフローが可視化される点で、これらの情報は、先ほどの気象衛星画像とはまた違った形で、防災実践に大いに貢献する。しかし、それと同時に、これによって防災実践を別様に組織化する道が、ここでも閉ざされていると言える。

容易に察せられる通り、上述の2つの防災実践観、すなわち、2つのタイプの災害情報観について、その優劣を問うことにはあまり意味がない。両者はともに、それぞれ別々の世界を構築しうるし、それぞれが長所と短所をもっている。むしろ重要なことは、災害情報に対する固定的な見方を排し(なぜなら、それはそのまま、防災実践観の固定化を生むのだから)、さらに別様のあり方を探り、既存のものとおわせて、われわれが防災にとり組むときの手駒を豊富にすることである。この意味で、筆者らが開発した防災ゲーム「クロスロード」(矢守ら、2005; 吉川ら、印刷中)は、上の2つのタイプの防災情報が、それぞれ、自然的対象、社会的対象に対する客観的で一意的な記述を中心に据え、それに応じた防災実践観を構築してきたことを踏まえ、それらとは異なる第3の途を志向したものだと言える。

一言で言えば、「クロスロード」では、自然的対象、社会的対象双方に関する相容れない複数の事実認識や、態度・価値の間の矛盾と葛藤を可視化し、それをベースとしたゲーム参加者の意見交換、対立と説得、コンセンサスの形成と破綻—これらのプロセスこそが防災実践(防災をすること)であるとの認識を生み出すことを目標としたものである。たしかに、「クロスロード」における「正解の欠落」(矢守、2007; Yamori, 2007)は、そこで流通する災害情報が、従来のものとは異なり、曖昧で多義的であることを示している。これは、これまでの災害情報観、すなわち、防災実践観をとる限りマイナスの評価を受けても仕方のない特性である。

しかし、上で述べたように、今日求められているのは、防災実践観の複線化であり、それはイコール、災害情報観の複線化である。特定の、そして、既存の災害情報観を墨守する限り、それがもたらすダブル・バインドをその内側から打破することは困難である。「クロスロード」をめぐる防災実践自身も、その例外でないことを自覚しつつも、常に、既往の災害情報が生み出すダブル・バインドに注意を向け、新たな防災実践のありよう模索する姿勢を保ち続けることが重要だと指摘しておきたい。

## 7. おわりに

今日の日本が、災害情報をめぐるダブル・バインドを警戒し、その克服を図らねばならない状況にあることを、矢守(2008)に従って強調して本稿を閉じたい。

社会学は、近代社会がもった「自己意識」だと言われる。これにならって言えば、「リスク社会」、あるいは、「災害多発時代」と形容される今日、災害リスクの探究と対策の最前線に立つことが期待されている災害研究も、防災知識・技術の獲得や開発という本体部分の活動を進捗させるのみならず、それが産み落とした知識・技術を前提として自然災害へと立ち向かう社会において、自らが占める立場や機能を再帰的に眼差す視線(自己意識)をもつ必要がある。言い換えれば、災害研究には、与件的対象としての自然現象、および、与件的対象としての人間・社会現象に関する知識・技術を獲得するだけでなく、社会システムの再帰性が増し、それにとっての与件的対象をシステム自らが生産していると多くの人びとが見なすような今日の「リスク社会」において、自らが果たしている役割を明確に意識することが求められている。

たとえば、防災研究は、地震リスク(1次の純粋な与件的対象)に関する情報・技術(地震動波形に関する知識や観測技術など)や、それを前提とした社会的な情報・技術(予知情報の生成・伝達や緊急地震速報のシステムなど)を生産している。しかし、これらの情報・技術は、副次的なリスクを伴う。たとえば、予知そのものの失敗、予知情報に伴う経済的損失や緊急地震速報に対する利用者のリアクションが引き起こすかも知れない事故などである。これは、見方を変えれば、「われわれは知ることによって益々不安の材料を増やしている」(村上, 1998, p.21)ということでもある。そして、災害研究は、これら自らの活動が生産した副次的なリスクをも、2次の、言い換えれば、再帰的な与件的対象と見なし、それに関する情報・技術を、自らのストックの内部へと組み入れてそれらを予測し制御しようとする。

以上のことは、現代の日本社会においては、災害情報を支えるコンテキストが複雑化し、災害情報が文字通りのメッセージとして流通する可能性が低下していることを示している。裏側から見れば、メッセージが流通することがもたらす帰結に関するメッセージの重要性、あるいは、メッセージの流通に関与する人びとの関係性に関するメッセージの重要性が高まっているということである。これは、メッセージと同様、いやそれ以上に、メタ・メッセージに注目し、特に、両者の間の葛藤や矛盾が生みだすかもしれないダブル・バインド状況に注意を払わねばならないことを示している。今後、災害情報を、こうした視点から検討することの必要性は、ますます高まっていくものと思われる。

## 引用文献

- Bateson, G. 1972 Steps to an ecology of mind. 佐藤良昭(訳) 2000 精神の生態学(改訂第2版) 思索社.
- 片田研究室 2003 平成15年5月26日 三陸南地震における気仙沼市民の避難に関する調査報告書(速報版).  
<http://dsel.ce.gunma-u.ac.jp/modules/newdb1/detail.php?id=8>
- 片田敏孝 2006 災害調査とその成果に基づく Social Co-learning のあり方に関する研究 土木学会調査研究部門平成17年度重点研究課題(研究助成金) 成果報告書.  
<[http://www.jsce.or.jp/committee/jyuten/files/H17j\\_04.pdf](http://www.jsce.or.jp/committee/jyuten/files/H17j_04.pdf)>
- 片田敏孝・児玉真・桑沢敬行・越村俊一 2005 住民の避難行動にみる津波防災の現状と課題—2003年宮城県沖の地震・気仙沼市民意識調査から— 土木学会論文集, 789/II-71, 93-104.
- 河田恵昭 2006 スーパー都市災害から生き残る 新潮社.
- 黒田洋司 2008 津波と市町村が直面する問題 吉井博明・田中淳(編) 災害危機管理論入門 弘文堂. p.50-54.
- 吉川肇子・矢守克也・杉浦淳吉 印刷中 クロスロード・ネクスト ナカニシヤ出版.
- 村上陽一郎 1998 安全学 青士社.
- 野村直樹 2008 やさしいペイトソン—コミュニケーション理論を学ぼう— 金剛出版.
- Sugiman, T. & Misumi, J. 1988 Development of a new evacuation method for emergencies: Control of collective behavior by emergent small groups. *Journal of Applied Psychology*, 73, 3-10.
- 田中淳 2008 災害情報のジレンマ 田中淳・吉井博明(編) 災害情報論入門 弘文堂. p.212-217.
- 上野直樹 1999 仕事の中での学習—状況論的アプローチ 東京大学出版会.
- 牛山素行・今村文彦 2004 2003年5月26日「三陸南地震」時の住民と防災情報, 津波工学研究報告, No.21, pp.57-82.  
<http://disaster-i.net/notes/200305e-qr.pdf>
- Yamori, K. 2007 Disaster risk sense in Japan and gaming approach to risk communication. *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 25, 101-131.
- 矢守克也 2008 「リスク社会」の自己意識—“非理系”自然災害科学の現状と課題 自然災害科学, 27, 120-128.
- 矢守克也 2007 終わらない対話に関する研究 実験社会心理学研究, 46, 198-210.
- 矢守克也・吉川肇子・網代剛 2005 ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション—「クロスロード」への招待 ナカニシヤ出版.
- 矢野智司 1998 生成のコミュニケーション(Gペイトソン) 作田啓一・木田元・亀山佳明・矢野智司(編) 人間学命題集 新曜社. pp.80-85.
- 吉井博明・田中淳・中村功・中森広道・三上俊治 2004 2003年十勝沖地震における津波危険地区住民の避難行動実態 文部科学省地震調査課委託報告書.